

## 日本を取り巻く 世界を俯瞰する

この連載も今回が最終回であるので、現在の日本の現状を俯瞰的に認識することを試みたい。

まず地球的視点から俯瞰してみよう。1987年にベルリンの壁が崩壊し、あつげなく冷戦が終わり、アメリカが超大国として世界の警察官を務めるというところになったが、結果は石油に絡む多くの地域で戦争が起きてきた。そして、中国は軍事力を強化し周辺に覇権を唱え、アメリカと対等な国家になろうと台頭している。一方、旧ソ連圏の東欧の国々には西側のNATOの勢力が浸透し、これに危機感を持ったロシアのプーチン大統領が反攻に出ることによって世界は再び新しい冷戦が始まったような状況になった。

このような国際的な紛争や激動は今後の展開が予測できないが、確実に予測できることもいくつかある。その最大のもは、地球の温暖化という現象とそれに伴う気象の変化である。北極海の氷が溶け偏西風の流れが変わり、世界各地に猛烈な寒さと暑さをもたらす、大型のハリケーンが各地で発生している。猛烈

# 現代社会を俯瞰する

vol. 10

松島 克守

Katsumoti Matsushima



Illustration: ネモト円筆



### PROFILE

まつしま かつもり  
俯瞰工学研究所 <http://www.fukan.jp/>  
所長(東京大学 名誉教授)  
東京大学工学部卒業、IHI航空機エンジンの生産技術者を経て、東京大学で生産システムの知能化、アレキサンダー・フンボルト財団奨学研究員としてベルリン工大でCAD/CAMの研究に従事。その後日本IBMでパソコン、製造業のマーケティング戦略の責任者、プライスウォーターハウス日本法人常務取締役を経て、99年より東京大学工学系研究科教授。経営戦略学専攻で「俯瞰経営学」を講義。総合研究機構・機構長、イノベーション政策センター長等を歴任、09年3月退官。現在も地域活性化プロジェクトの支援、プラチナ構想ネットワークなどを推進するとともに、上場企業の社外役員など経済活動にも参画。(NPO) ビジネスモデル学会会長、(NPO) ITコーディネータ協会理事などを務め、主な著書に『知の構造化の技法と応用』、『地域新生のデザイン』、『MOTの経営学』などがある。

な熱射と干ばつは多くの地域で砂漠化を進行させる。

大きな気象変動やアジア、アフリカの人口増加と経済成長は深刻な食糧危機、水資源の枯渇、エネルギー危機そして環境汚染を引き起こし、これが世界の不確実性を高めている。このような地球的な環境は日本が置かれている外的な環境であるため、これらを踏まえた日本の立ち位置と行動を考えなければならぬ。

### 日本経済の 時間的俯瞰

過去50年くらいの日本の来た道を俯瞰してみよう。日本経済は図1に示すように1950年代から3つのフェーズで進行して来た。

第1フェーズは、第1次オイルショックまで高度成長の時代で、世界の激動にあつても2桁成長をなしとげてきた。所得倍増論、日本列島改造論、東京オリンピック、大阪万博と劇的に経済が成長して、世界第2位の経済大国となった。一方で、水俣病、四日市喘息やイタイイタイ病と日本列島は公害で汚染されていった。現在の中国の状況と全く同じである。ところが、石油産出国が連携して原油価格の大幅な引き上げを行う第1次オイルショックが突然起こる。

第2フェーズでは、強烈なオイルショックに対応するため日本経済は構造改革を余儀なくされ、成長率を5-6%に落ちしたが、狂乱物価を乗り切った80年代は、まさに日本の

黄金時代であった。日本式経営もて離され、海外からその研究に多くの視察団が来るという時代であった。そして公害で汚染された日本列島も環境を修復していく。

第3フェーズは、1990年のバブル崩壊から今日まで低成長の時代で、この失われた20数年の中で国際的な影響力を失ってきた。日本式経営の評価は地に落ちた。現在の日中、日韓の摩擦も相対的に力を失った日本に対する挑戦である。

2000年代後半から円安もあり2%程度の経済成長を取り戻したが、2008年に想定外のリーマンショックがあり、経済活動は甚大な影響を受けた。幸い企業の必死の努力で、そのままマイナス成長を続けるという第4フェーズにならずに済んだが、現在も成長できない第3フェーズの段階にある。一方、河川の水質や都市の空気という失われた自然環境は大幅に回復された。多摩川にも一千万匹を超えるアユが遡上するといふ。

## 空洞化する日本の製造業

この間為替は図2にあるように、70年代の前半は1ドル3000円の

モデルに移行しつつあり、設計部門も空洞化が進行している。

## 日本の内部構造を俯瞰する

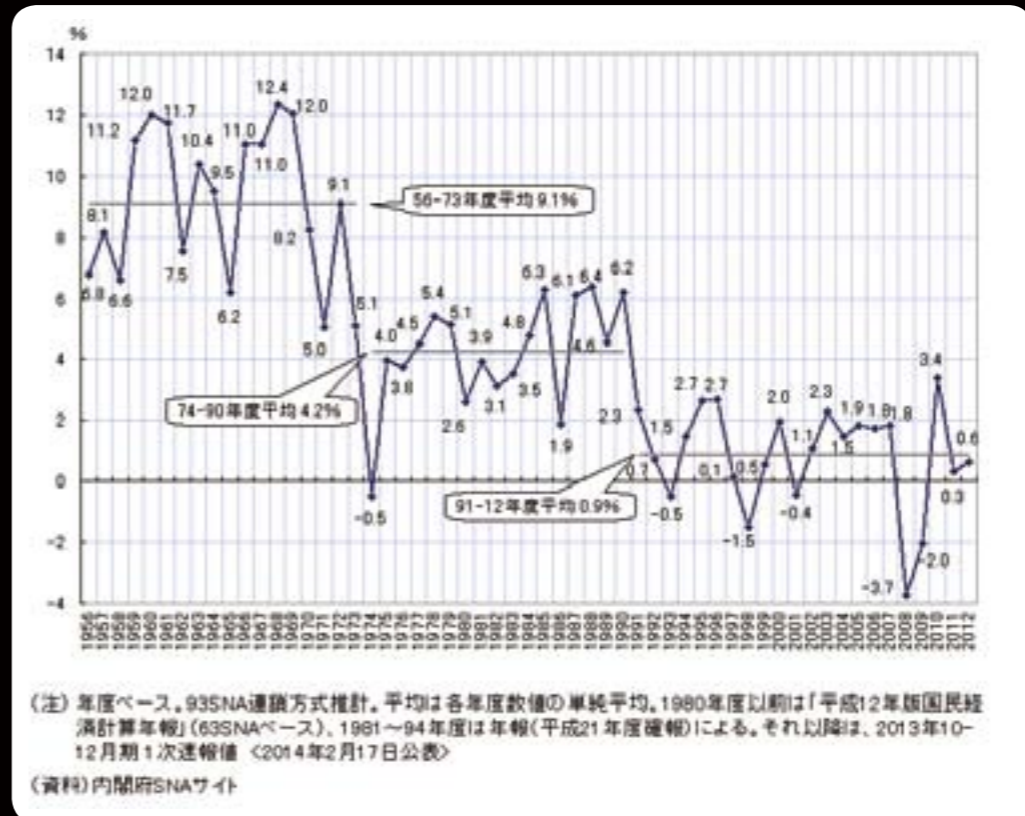
日本経済のこれまでの足取りを俯瞰してきたが、激動する世界情勢の変遷の中で相次ぐ危機を必死の努力で乗り越えることにより、日本は成長し豊かな社会を実現して来たと思ふ。しかし現在の日本社会は多くの課題に直面している。

日本の内部構造を見ると、まずバブル以降の景気回復と称する財務政策により巨額の赤字が垂れ流され、年間GDPの2倍の1千兆円を超える国家債務を持つ国となった。この間、物価は下がり続けたが、賃金は上がることも下がることもマクロ的にはなかった。しかし多くの正規雇用が失われ多くの不正規雇用が発生し、日本でも経済格差が大きくなってきた。特に、200万人にもものぼる若年失業者の問題は深刻である。そして、依然として男女間の賃金格差が大きく、女性の労働力も活かし切っていない。にもかかわらず、労働力が足りないの移民を入れるという人もいる。

経済成長の過程の中で少子化が進

【図1】日本経済の3フェーズ

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/4400.html>



レートであったが、バブル崩壊後は実に100円台という200円もの円高の水準になった。しかし、日本はこの歴史的な激変を企業の必死の努力によりこれを克服した。この期間は為替レートは、80円か

ら1200円の中で大きく乱高下し、円高と円安は日本経済を翻弄してきた。今はたまたま円安によって製造業を中心として好景気のような雰囲気をも出し出しているが、3・11以降膨大な燃料の輸入と円安のため、貿易収支は巨額の赤字となった。これを資本収支で補完しているが、3兆円という支出に

うな話で一万六千円代を回復したが、期待された新興国の経済が怪しくなり、中国も格差や環境汚染その他バブルの後遺症によって成長率が減速し、最近ではウクライナでの冷戦構造の再現により1万5000円前後で推移しているが、この後は全く不透明である。マクロ的には東第一部の時価総額は90年以降ほぼ3百兆円で一定である。

この為替レートの乱高下と、国際的には高止まりしている日本の人件費、そしてアジアの旺盛な消費を求めて、日本企業はアジアを中心として海外展開を進めた結果、この10年間に海外生産比率は26%から35%に上昇し、日本の製造業は空洞化して来た。ただ中国もアジアも安いといわれる人件費は急上昇し、低コストの労働力を求めるだけの海外展開はすでに時代遅れになってきた。

東京株式市場はバブル崩壊直前に4万円近い値を付けたがその後、一時8000円を割るまでに崩落し、リーマンショック直前に一万八千円円近くに反しながらもリーマンショック後は再び八千円を割りこみ、そしてアベノミクスという魔法のよ

一方、日本の製造業は日本で開発し販売してきた製品の機能を絞った製品を海外で現地生産して販売してきたが、このビジネスモデルは、本格的な現地モデルを市場に投入する韓国に大きな遅れをとり、ビジネスモデルの変革に遅れた電機産業はリーマンショック以降回復できずに凋落した。そして現在では現地で開発、調達、生産、販売するビジネス

【図2】劇的に変動する為替

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/5070.html>



み、日本は世界に先駆けて高齢化社会に突入した。高齢化は経済にも、国家財政にも、もそして社会構造にも重大な課題を突きつけている。これを前向きに思考して生活水準の高い社会を築いていかなければならない。

日本には過去長期にわたって磨かれて蓄積されている、文化、技術、倫理の高い社会構造などという無形の資産がある。さらに3・11は日本人の助け合いの精神を磨くと同時に、世界に日本人の精神力を再認識させた。そして、失

日本だけである。空洞化する製造業でもモジュールの組み立てである電機産業は凋落したが、基盤となっている高機能材料は長年の知識の蓄積の結果、日本が圧倒的な競争力を維持している。アジアの生産力と高機能材料を活かして先進国の市場をとってきたユニクロのようなビジネスモデル、日本のきめ細かなマーケティングと物流、接客技術でコンビニというビジネスモデルはアジアに広く展開されている。

## 世界が好感を持ち、アジアが目指すモデルとなる

た。そして、失われた20数年の経済の停滞にあつても、文化的には円熟さを増し、日本文化は国際的に価値ある文化として認められている。文学、音楽や芸術分野でも世界的な人材を輩出し、野球やサッカーでも欧米の名門チームで有力メンバーとして活躍している。アニメやコミックそしてゲームというサブカルチャーは国際的に圧倒的な存在感を持っている。

以上、日本を俯瞰的に概観したが、日本の今後の進むべき道は、地球的な変化のトレンドを認識した上で、社会の価値観と技術の時代的な変化に対応した行動をすることである。課題を前向きに解決し、高齢化社会にあつてもこれまで以上に高質な生活水準を持続的に維持していく経済構造を築いていく必要がある。いたずらなナショナリズムや無気力、無関心な精神構造にならないように、お互いに支え合い前向きに生きていくことではないだろうか。